

## 「会長就任2期目のご挨拶 この1年間を振り返って」

会長 神林 勲（北海道教育大学札幌校）



会長として2期目の任期が2021年4月からスタートしました。この3年間も役員や会員の皆様のお力をお借りし、北海道体育学会が益々発展するように尽力していきたいと思っております。すでに1年が過ぎている段階

ではありますが、改めまして、皆様のご協力をよろしくお願い致します。

さて、この1年間は何と言っても12月に開催された学会70周年兼第60回記念学会大会の対面を中心としたハイブリット形式での開催につきると思います。当日は58名の対面参加者、14名のオンライン参加者の計72名の方に参加して頂きました。ホテルライフポート札幌のご協力で感染対策も万全、プログラム最後の懇親会も無事実施されました。大

会内容は、これまでと同様に口頭発表、若手研究者によるコンペに加え、学会賞記念講演や記念研究助成の成果発表と充実したものになりました。大会当日の挨拶でも述べたように、開催にたどり着くまでに本当に多くの時間と関係者の尽力がありました。この場をお借りして、再度、お礼申し上げます。

最後になりますが、コロナ禍の2021年度も慌ただしく過ぎ去り、2022年度のスタートです。2期目の2年目、まずは春季の話題提供発表における新たな試みに力を注ぎたいと思っております。また、東海大学札幌キャンパスで行われる学会大会をどのようにコロナ禍前の状態に近づけていくかも課題です。役員や事務局の皆様とお力を借りながら、2022年度も北海道体育学会が少しでも前進できるよう、努力したいと思います。

## 「記念学会大会へのご参加、ありがとうございました」



記録的な降り出しの遅さに、「すわ暖冬か？」と思っておりましたが、未曾有の大雪となってしまいました。会員の皆さま方、いかがお過ごしでしょうか？

さて、12月4日（土）・5日（日）に行われました北海道体育学会70周年兼第60

理事長 石澤 伸弘（北海道教育大学札幌校）

回記念学会大会におきましては、たくさんの会員の皆さま方にご参加いただきました。心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

久方ぶりの「対面形式」の学会に、大げさですが心が躍る心境でした。思い起こせば、2年前より企画が始まり、研究委員会の関先生と多賀先生のご尽力の下、着々と準備が進んでまいりましたが、折からのコロナ禍によって順延が決定し、昨年末に満を持しての開催

となりました。

開催にあたっては歴代会長の先生方よりご祝辞もいただき、神林会長よりご披露いただきました。また、名誉会員の須田力先生よりご寄付もいただきました。これからの学会運営に有効活用させていただきます。

これらの点にも感謝を申し上げます。

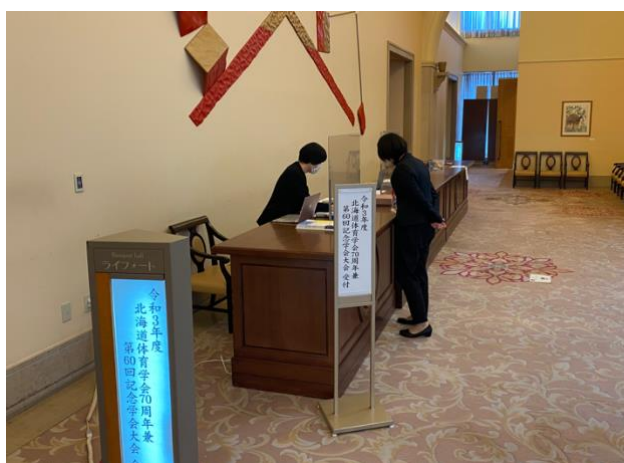
次年度も対面開催、そして従来のスタイルに戻りますことを切に祈りたいと思います。そしてその際には、より多くの皆さま方のご参加をお待ちしております。

## 写真で振り返る「北海道体育学会 70 周年兼第 60 回記念学会大会」



今年度の学会大会は「記念大会」としてホテルライフオー札幌を会場として開催されました。また、オンラインで発表を同時配信し、ハイブリッド形式での開催を実現しました。

会場では参加者1名に長机1台という形式で着席し、休憩時間中も会場内で密にならないよう距離をとり無事に学会を開催できました。



会場受付の様子



オンライン配信用機材

# 北海道体育学会第 60 回記念学会大会 傍聴記

土橋 康平 (北海道教育大学旭川校)

今年度の学会は対面とオンラインを併用したハイブリッド式の学会となっていた。その中で、研究助成成果および学会賞における発表について稚拙ながら記載する。

第一演者の宮崎俊彦先生 (北海学園大学) は中学生・高校生の冬季練習の場所制限に関する課題から、学校の廊下を活用した牽引走の負荷の違いに着目し、最大疾走パワーとの関連性について発表した。その中で、性別・中高生問わず 50 m 走の最大疾走速度の約 80% がスタートから 6 歩目 (10 m) までに出現することから、その区間で疾走速度を高める重要性を示唆した。また、牽引走の負荷を体重の 15% および 35% に設定したところ、体重の 35% の負荷で牽引走を行ったときの最大疾走パワーが体重の 15% の負荷時の最大疾走パワーよりも大きいことが示された。これらの結果から、10m 程度の距離でもその区間における最大疾走速度を向上させるトレーニングは、最大疾走速度の向上 (ここでは 50m における) に貢献する可能性があり、そのトレーニング法として体重の 35% の負荷である牽引トレーニングが効果的であることを示唆した。しかしながら一方で、体重の 35% 負荷では前に進まない、歩くように牽引してしまう選手もいたため、そのような場合は負荷を軽減して最大疾走速度を増加させる必要も示唆された。



宮崎先生の発表の様子

第二演者の多賀健先生 (苫小牧工業高等専門学校) は道内の非エリート・ユースサッカー選手における競技パフォーマンス (ドリブルテスト) および体格・体力 (20m 走・敏捷性・有酸素性能力) と実行機能 (ストループ課題: フェイント等の相手選手との駆け引きやその対応力等に関わる機能) の関係について発表した。ストループ課題

に関しては、文字 (黒インクで書かれた色名 (あかなど) が提示され、その文字を読み上げるもの)、色 (複数の色のインクで書かれた無意味な文字列の色を読み上げるもの)、不一致 (色名とインク色が一致しない文字のインク色を読み上げるもの) 条件の 3 条件で構成されるものであった。その中で、ストループ課題の色条件と 20m 走の間に負の相関関係が見られ (認知機能が低いものほど 20m 走タイムが遅い)、ストループ課題の色条件および不一致時条件と有酸素性能力の間に正の相関関係が見られた (認知機能が低いものほど有酸素能力が高い)。これらの結果から、非エリート・ユースサッカー選手において、スピードやパワー、有酸素性能力を高めるトレーニングを行うことは 20m 走タイムの短縮や有酸素性能力の向上と共に認知機能の向上に関係することが示唆された。

第三演者の石原暢先生 (神戸大学) は児童期の体力と他者の意向に沿って行動する向社会性 (空気を読む力) との関係について発表した。向社会性は Social mindfulness paradigm を用い、画面に提示された 4 つのアイテムの中から、好きなものを 1 つ選択する課題である。提示されるアイテムは 3 つの同一アイテムと 1 つの単一アイテムから構成される。自身の後にアイテム選択する子どもに対し、多数派選択 (3 つあるアイテムの選択) の回数を向社会性の指標として用いた。その結果として、20m シャトルランと多数派選択の回数に正の相関関係が認められた。すなわち、児童期の習慣的運動に伴う有酸素性持久力の向上は学力向上だけでなく、向社会性の発達にも重要である可能性があることが示唆された。全ての研究が学校現場における課題や疑問を基に行われており、今後現場にその知見を活かせる非常に重要なものであった。

学会賞は、4 人の若手研究者が発表し、その中で藤江衣織さん (酪農学園大学) が受賞した (演題: 「持久性運動の 5 分前の糖質溶液摂取は運動誘発性低血糖を引き起こさない」)。発表スライドも非常にわかりやすく、専門領域外の人に対しても理解が容易であった。藤江さん含め、全員が堂々と発表しており次回以降の大会でも若手研究者の積極的な参加を期待したいと感じた。

## 第60回記念学会大会 傍聴記

高橋 正年 (東海大学)

本年度の学会は、対面（ホテルライフオーブ札幌）で58名、オンライン（リアルタイム配信）で14名によるハイブリッド方式で開催された。

若手研究者賞は、藤江衣織先生（酪農学園大学）が受賞した。「持久性運動の5分前の糖質溶液摂取は運動誘発性低血糖を引き起こさない」との演題で、運動5分前の糖質溶液摂取は運動誘発性低血糖を引き起こす危険性が低いことを示唆した。

口頭発表においては、太田愛先生（北海道文教大学）は「WEB サービスを使用した女子アスリートの栄養サポートの一例」の研究において、食事摂取のサポートと適切な食生活との関係を示した。浅野勇先生（北海道教育大学大学院）は「児童の学級集団意識の違いが体育授業における学習行動に及ぼす影響」の研究にて、学級集団意識が身体活動とコミュニケーションに影響することを明らかにした。千葉佳苗先生（北海道教育大学大学院）は「小学5年生の敏捷性と全身持久性の向上を目的とした運動プログラムの介入効果と肥満度との関係」の演題において、ヒートアップ運動の介入と敏捷性と全身持久性の向上との関係性を示した。高瀬淳也先生（北海道教育大学旭川校）は「極小規模保育所における幼児の基本的な動作の種類と出現頻度の一考察」の研究にて、保育士による動作の導きが幼児の動作の発現の影響を示唆した。竹田安宏先生（北海道札幌西高）は「高校体育男女共習授業の特徴と男女の意識差」の研究にて、女子は男子の主体性を、男子は女子の学びを深める役割について示した。近藤佑斗先生（北海道教育大学教職大院）は「新型コロナウイルス感染拡大がもたらす学校現場への影響」の研究において、ICTの活用と男女共習の推進を示唆した。國行海斗先生（北海道教育大学教職大院）は「ダブルダッチの入り方における"タイミングのとり方"に関する考察」の研究にて、動感的な捉えが粗形態発生に機能する可能性を示した。清野宏樹先生（北海道釧路養護学校）は「知的障害特別支援学校の体育授業における『クロスミントン』の実践」の演題において、道具と競技の特性から障害のある生徒の有効性を示した。石井由依先生（帯広大谷短大）は「保育者養成課程学生における子どもの健康観に関する一考察」の研究において、LSPを導入した授業が多様性のある保育者の養成に寄与

できるとした。波多野慶先生（北海道大学大学院）は「高酸化炭素曝露が下腿筋運動ニューロンの興奮性に与える影響」の演題において、 $\text{PaCO}_2$  上昇が脊髄運動ニューロンの興奮性と筋収縮能力に影響を及ぼさないことを示唆した。樋口泉先生（釧路工業高専）は「卓球ブラボールの製造年による反発評価と比較」の研究にて、製造時期の比較で大きさの順位が一致したことを示した。山口明彦先生（北海道医療大）は「ランナーの練習量の違いが及ぼすマラソン大会前の月間走行距離の影響」の研究にて、月間走行距離とタイムの有意な関係を示した。板谷厚先生（北海道教育大学旭川校）は「組体操トレーニングによる立位姿勢の安定性向上」の演題にて、組体操トレーニングは、立位バランスの環境適応性を向上させることを示唆した。鈴木真代先生（札幌国際大学）は「項目反応理論によるウエイトトレーニング試技評価尺度の特性分析」の研究にて、動作の段階評価に適切な形容を付することでの動作評価の適切性を示した。内藤貴司先生（北海学園大学）は「屋外暑熱環境下における輻射熱の違いが種々の体温動態および持久性運動能力に及ぼす影響」の研究において、輻射熱が付随した皮膚温が持久性運動能力の決定要因になることを示唆した。小松敏彦先生（心體智研究所）は「ヒト三角筋の形態的特徴」の研究にて、骨格筋形態の理解と傷害リスク回避との関係を示した。佐々木将太先生（北海道文教大学）は「高校野球選手のたんぱく質および炭水化物の摂取源に関する検討」の研究にて、高校野球選手のたんぱく質と炭水化物摂取源となる食品群に摂取の偏りがあることを示した。河本岳哉先生（北海道教育大学附属札幌小）は「小学校体育学習における目標志向性のタイプ別からみた動機づけ雰囲気比較」の研究にて、熟達雰囲気知覚が課題志向性に正の影響を与えることを示唆した。



千葉先生の発表の様子

## 「若手研究者賞の受賞にあたり」

藤江 衣織 (酪農学園大学大学院)

この度は、若手研究者賞をいただき、大変嬉しく思っております。選考していただいた先生方に心より感謝申し上げます。また、本研究を進めるにあたり、ご指導いただいた山口太一先生をはじめ、共同研究者の先生方、協力してくださった後輩の皆さんのおかげで賞をいただくことができました。支えていただいた皆様に深く感謝申し上げます。

今回の研究テーマである「持久性運動 5 分前の糖質溶液摂取は運動誘発性低血糖を引き起こさない」は、運動開始の直前 (5 分前) に糖質溶液を摂取し、運動を開始した場合に運動誘発性低血糖は生じるか否かを検討したものです。今まで、運動開始の 15 分前までの糖質摂取は運動誘発性低血糖を起こす恐れがあるということが明らかとなっており、糖質摂取と運動開始との間が 15 分よりも短い運動開始のタイミングで糖質摂取をした場合、どのような影響を与えるのか疑問に思ったことをきっかけに本研究を行なうことを決めました。本研究の結果から、運動開始の直前 (5 分前) にスポーツドリンクと同



等量の 30g の糖質を含む溶液を摂取し、運動を開始しても運動誘発性低血糖が生じないことが明らかとなりました。

今回の運動誘発性低血糖の研究を終えて、さらに検討すべき点を発見することができ、今後も研究を続けていきたいと思っております。今回の経験を糧にし、スポーツの現場に還元できるよう全力で努めてまいります。至らない点も多く、未熟者ですがどうか引き続き、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

## 研究委員会活動報告

研究委員長 中島 寿宏 (北海道教育大学札幌校)

本年度の北海道体育学会 70 周年兼第 60 回記念学会大会では、口頭発表 19 題と助成研究報告 3 題の発表をいただきました。昨年は新型コロナウイルス感染拡大の影響によってオンラインでの研究発表となったため、2 年ぶりの対面での口頭発表となりました。オンライン形式での発表と比べて、対面での発表ではフロアからの質問やコメントが多く出ていたと感じます。また、発表後も内容について会場内で発表者と参加者がやりとりできるなど、対面実施での良さを感じた参加者が多くいるようでした。

今大会では、本学会研究助成事業に採択された宮崎俊彦先生、多賀健先生、石原暢先生の研究についての報告会が行われました。北海道における体育・スポーツ研究の活性化と道民のスポーツライフの充実に寄与する、大変有意義な研究となったと思います。

また、若手研究者賞には 4 題のエントリーがありました。厳正な審査の結果、藤江衣織氏 (発表演題: 持久性運動の 5 分前の糖質溶液摂取は運動誘発性低血糖を引き起こさない) が受賞されました。授賞理由は、先行研究を踏まえた新規性を有しており問題点が明確に示されていること、糖質摂取のタイミングの観点からインスリンショックという問題の解明に取り組む独創的な研究であること、統計処理や解釈も適切に行われており今後のスポーツ界の発展につながるとても有意義な研究であること、などが挙げられました。若手研究者として今後のさらなる活躍が期待されます。今回受賞を逃した方々におかれましても、ぜひこれからも地道な研究を継続していただければと思います。そして、来年度もまた多くの方が若手研究者賞に挑戦することを願っております。

## 編集委員会活動報告

編集委員長 山口 太一 (酪農学園大学)

神林先生、石澤先生、永谷先生の元で編集委員を務め、今年度より編集委員長を仰せつかりました。査読方針や投稿方法などの変更により諸先生方がより良い方向へ導いて下さった北海道体育学研究がさらに著者にとっても読者にとっても良い雑誌となるよう任期中に何かできればと野心を持っておりましたが、何もできずに1年が過ぎようとしています。何より他の編集委員の先生方、著者や査読者の先生方、北海道リハビリの山本さんのお陰で北海道体育学研究第56巻が無事に発刊されただけでも微力な私の1年目としては十分なスタートを切れたのかもしれない。

北海道体育学研究第56巻には総説1編、研究ノート3編、実践研究5編の計9編が掲載されました。一方で、残念ながら6編の論文の不掲載が決定し、2編の論文取り下げがございました。この計8編のうち、5編が小学校や中学校の現場の先生方が書かれた実践研究論文でし

た。審査領域が専門分野ではないため偉そうなことは申し上げられませんが、教育現場で得られた貴重なデータを論文化させたいという先生方の強い意志を感じる論文が多かったように思います。ただ、もともと論文を書くために緻密に計画された研究ではなかった場合や倫理的な配慮や重要なデータを補完する調査および測定などが不足していた場合もあったため、研究論文として審査をしてしまうとなかなか掲載決定には至らなかったという印象が強いです。しかしながら、現場の先生方の貴重なデータを何かしらの報告として掲載するための仕組み作りは北海道体育学研究にも必要と考えております。私が編集委員長を務めている間の最重要課題として取り組む所存です。

末筆となりますが、北海道体育学研究は第57巻も2022年3月末を投稿締め切りとして投稿を募集致します。沢山の投稿をお待ちしております。

## 広報委員会活動報告

広報委員長 森田 憲輝 (北海道教育大学岩見沢校)

昨年4月から、高瀬先生の後任として委員長を仰せつかり、早1年が過ぎようとしています。しかし、昨年度に引き続きこの1年もご存じの通り、新型コロナウイルス感染症の猛威の中で、私もそしておそらく皆様もそれまでの日常とは異なる日々を、研究者らしい活動も制限され、そして研究コミュニティを支援する本委員会のような活動もあまりないまま過ごしております。

さてそんな中、今年度の学会大会は一年延期となっていた記念大会が、タイミング良くといっても過言ではない第5波と第6波の狭間にあたる11月にホテルライフオート札幌にて、大学校舎とは違う豪華な施設の中で開催できました。このことは、この記事執筆しているのは1月なのですが、そこから振り返ると、まさに僥倖といえるものなのではないかと思うところです。

今期の広報委員会は、私と永谷先生(北翔大学)の2名で活動しております、この記念大会は2人ともカメラを片手に発表の様子だけでなく、発表者と質問者のデ

ィスカッションの空気感も写せないかと徘徊し、またホテルを会場とすることも今後そうそうないだろうとのことで、学会広報の宣材写真にすべくあちこちを撮影してきました。

惜しむらくは本大会ではポスター発表が催行されなかったことで、ポスター発表そしてその場でのディスカッションができていれば、本学会の熱気を発信できる宣材写真ができたなと思うところです。

まずは会員の皆様には、本ニュースレターを通じて記念大会の雰囲気そして各発表者の研究者としての真剣さや熱意を感じていただければ幸いです。

他方で広報委員会としてできることについてアイデアそしてご提案がありましたら、何なりと申しつけいただければと思います。せっかくですので、入会案内のポスターも本ニュースレター第13号の最終ページに掲載させていただきます。

## 事務局より

塚本 未来 (東海大学)

平素より北海道体育学会の活動にご理解とご協力を賜り御礼申し上げます。本学会幹事として事務局業務を担当しております塚本未来(東海大学)と申します。今年度より、本学会事務局は本本理可(藤女子大学)、秋月茜(拓殖大学北海道短期大学)、私を含む3名で運営しております。

2021年は昨年度に続く新型コロナウイルス感染症の活動自粛が続く中のスタートとなりましたが、北海道内外の地域より新会員の皆様が加わり、本学会の更なる発展が期待できます。

例年5月に開催しておりました臨時総会は、今年度もメーリングリストを用いた形式で行いました。この形式では多くの会員の皆様に資料をご覧いただける機会となったことから、来年度もメーリングリストによる審議を予定しております。また、昨年度から延期となっております北海道体育学会70周年兼第60回記念大会をハイ

ブリット形式にて実施することができました。感染症対策のなか、ご参加いただきました皆様にはご協力を賜り心よりお礼申し上げます。研究・教育に携わること発表・交流の場として、改めて対面開催での良さを実感いたしました。

2022年度の本学会の活動計画として、これまで行われていた「話題提供発表」をリニューアルいたしました。

「北海道体育学会研究発表会(仮)」と変更し、発表は業績としてカウントする形も含めて実施する予定です。また、第61回北海道体育学会の開催は、2022年11月12日・13日(担当大学:東海大学)に予定されております。最新情報につきましては、学会HP(<http://www.hepehss.jp>)やメーリングリストを活用してご連絡させていただきたく思いますので、ぜひご確認いただけますようお願い申し上げます。

連載：リレーエッセイ

## <大学教員1年生>

帯广大谷短期大学 石井 由依

私はこれまで、大学教員を目指して非常勤講師や子どもへの運動指導を並行しながら研究活動を進めてきました。今年度、ご縁があり短期大学の専任講師として採用を頂き、希望と期待を胸に十勝へ移住いたしました。一人暮らしは数十年ぶりでしたが、寂しさを感じる瞬間も無く「あっ!」という間に一年が過ぎようとしています。大学教員1年生の生活は、初めてのことばかりで驚きも多く、「大学教員ってこんな仕事もあるの?」と、多忙な職務や職責を実感し、新鮮かつ刺激の多い日々となりました。講義では、専門外の科目を担当することもあり、一から勉強することの楽しさと厳しさを痛感しながらも、研究分野の幅が広がることに期待を抱いています。また、手探りの中での学生対応を通して、自身の学生時代を改めて振り返ることが多々ありました。今思えば、諸先生に対して、知らず知らずのうちに失礼な言動を重

ねていたことに気付かされ、恥ずかしさと反省の気持ちでいっぱいになります。アポイント無しでの研究室訪問や、締め切り間近になってから提出物の添削をお願いする等、先生の都合など頭のない学生だった私です。今、学生を目の前にすると過去の自分に対して指導をしているような感覚でいます。学生時代、失礼ばかり働いていた私に対して、時には厳しくも温かな対応を頂いた先生方には感謝と尊敬の念を抱きます。これからも自分らしさを忘れずに、お世話になった先生方の背中を追いかけ日々、精進していきたいと思っています。この一年は、研究よりも教育が中心となりましたが、大学教員2年生となる次年度では、教育と研究のバランスを取りながら研究活動にも力を入れて取り組みたいと思います。まだまだスタートを切ったばかりの未熟な私です。今後ともご指導ご助言頂けると幸いです。

★★

## 編集後記

本年度より広報委員の任に着きながら、早1年が過ぎようとしています。会員の皆様におかれましても、様々ところで、試行錯誤の毎日とお察し致します。ワクチン接種も進むなか、新たな株が次々と感染拡大を引き起こし、なかなか先が見通せない状況にあります。

しかしながら、憂いていても始まらず、進めぬ研究をコロナに当たってもどうにもならず、新たな展開を能動的にしていかなければなりません。本学会においても70周年兼第60回記念学会大会として、ハイブリッド形式ではありましたが、2年ぶりの対面開催を敢行しました。今後の新たな開催のカタチとなったのではないかと感じています。東京2020夏季オリンピック・パラリンピック、北京2022冬季オリンピック・パラリンピックも様々な制約の中無事終了し、多くの感動をいただきました。スポーツの素晴らしさを改めて実感すると共に、スポーツを通じて多くのことも考えさせられました。また、我々、体育・スポーツに携わるひとりとして、何が出来るのか？すべきなのか？考えさせられます。

誰もが同じ目的に向かう必要もなく、出来ることも限られています。本学会、役員、学会員、研究者、一人間として、まずは出来ることを淡々とクリアしていくことなのかと感じております。ということで、まずは、例年通りではありますが、ニュースレターの発行を。作成にご協力頂きました皆様に心より御礼申し上げます。

広報委員 永谷稔

★★

ご多忙の中、原稿をお寄せいただいた先生方どうも有り難うございました。深く感謝申し上げます。

北海道体育学会ニュースレターNo. 13      令和4年3月14日発行      広報委員会委員長 森田 憲輝

是非ご覧下さい 北海道体育学会公式ホームページ <http://hspehss.jp/>